

「ヘクラ」か「ヘグラ」か

——民俗学の小さな問題点——

歳 森 茂

「ヘクラ」か「ヘグラ」か

舳倉島とは石川県輪島市の沖 49 キロの日本海に浮ぶ幅約 1 キロ、長さ 2 キロ、標高 12.4 ㍎の平らで細長い小島である。この島へ春から秋にかけて輪島市の海士町（あままち）から海女が集団移動してアワビ・サザエなどを採取する風習があり（今はかなり変化しているが）、民俗学や人文地理学などでは早くから着目し、幾多の調査がなされている。ところがこの島の呼名が一定していない。ある人はヘクラといい、ある人はヘグラという。決定的印象を持つのは、女性民俗学研究会が、昨年刊行した「軌跡と変容——瀬川清子の足あとを追う——」（1986, KKぎょうせい）の中の 7 頁にある語である。これは著名な民俗学者、瀬川清子氏の業績の一部である「海女」（未来社、1970）を、関西学院大教授 T₁ 氏が英文で紹介した文章の一部であり、そこに出てくるこの島の紹介はすべて Hekura Island である。例をあげると

They settled in Hekura Island and got the monopolization of sea-ear haul at Hekura and Nanatsu Islands under the patronage of the feudal lord.

のようである。つまり海外へはヘクラジマとして紹介している。瀬川氏自身は何と呼んでいるか。故人となられた今は分りにくいことであるが、「海女」にはすべて漢字で舳倉島とあっていっさい仮名をふっていない。ただ関敬吾氏の「瀬川清子さんとの出会い」（女性と経験 9（1984）、女性民俗学研究会、p 2）によればヘグラのようである。即ち、関氏は

昭和 8 年、昔話の研究をはじめたころ、私は柳田国男、比嘉春潮共同編集の「島」の同

人になっている。「九年度版」を見ると、当時の私の上司であった東大図書館長・柿崎正浩先生の「島の思い出」という一文がある。今、考えると多分その推薦によったものであろう。そうして、その同じ巻に海女の写真と瀬川さんの「舢倉の海女」と題する長文の調査の報告書がある。これが、わたしの記憶にある瀬川さんとの最初の出合いであったろう。

この報告書のはしがきに、本稿は「移動村落」としての「ヘグラ島」訪問記行の一部である。昨夏、休暇を利用して舢倉島に渡り、凡三週間を海女と起居を共にし、ノミとシラミに攻められながら、親しくその私生活、島の生活を見聞し、それを素材として取扱った「報告手記」に過ぎないとある。

と書いている。

「舢倉島の海女」の原文を拝見していないので、これ以上のことは分らない。

私が輪島を初めて訪れたのは、昭和59年2月18日の夕方である。輪島市漁協指導課長小岩氏の紹介により、「輪島切っでの最高の海女」（小岩氏の表現）である佐渡春代さんの宅で、春代さんの主人の昭八氏と二人のあま漁に関する話を伺った。私も最初はヘクラジマだと思っていた。そのほうが呼び易かったからである。取材を終えて帰宅してからもそう思っていた。その誤ちを正してくれたのは私の携行したテープである。いつものことながら、ゆっくり時間をかけてテープを文章化する。すると驚いたことに、春代さんの発言はすべてヘクラジマである（昭八氏の島の名称に関する発言はなし）。その日の夕方6時から8時過ぎまでの取材で、春代さんはヘグラ又はヘクラジマという発音を10回行っているがヘクラジマとは全くいってない。例をあげると

春代「私らでも輪島へ住むより舢倉（ヘグラ）のほうが……時間的にすりゃー長い。」
歳森「ああ、そうですか」春「輪島のほうで、ようて（よく居っての意）3カ月……」歳
「ああ、こちらで3カ月……」春「ヘクラジマのほうが……」歳「3カ月いうのは冬の3カ月？」春「はい。そうそう。冬場だけ……」

のようである。

この10月5日、民俗学会の帰りに、私の敬愛する漁業史研究家〇氏を、悪いけど試してみた。「先生は舢倉島をどう読まれるか。」「ヘクラジマでしょう。私も調べてみました」という返事。

さて、諸著ではどのように扱っているか。まず日本大辞典刊行会「日本国語大辞典」（昭50）であるが、第17巻624頁に舢倉島がある。これには「へくら

じま」と記されている。次に角川書店刊「角川日本地名大辞典」(昭56)17巻石川県, 802頁の舳倉島には「へぐらじま」とある。このように権威のある本でも二通りに分れている。牧田茂氏の「海の民俗学」(岩崎美術社, 昭41)には「へくらじま」と書いてある。

さて、地元の識者はどのように扱っているか。金沢市に住む小倉学氏の「日本の民俗, 石川」(第一法規, 昭49)82頁には「へぐらじま」と書かれてある。筆者の知人である輪島市の郷土史家, 平谷平蔵氏の「奥能登」(北国新聞社, 昭56)13頁には「へぐら島」と記されている。昨年刊行された金沢市の北国新聞社刊「能登舳倉の海びと」では「へぐら」である。その15頁には「輪島市と舳倉島を結ぶ唯一の交通機関が定期船「へぐら」(143トン)である」とあり, 又, 67頁には「へぐら三神——渤海への道標」というタイトルがある。輪島市が発行した「昭和59年度舳倉島」2頁の一部をとれば以下のようなものである。

……昭和55年7月からは県・市・能登商船・漁業協同組合・地元海士町の出資による、へぐら航路船が設立され、新造船「へぐら」によって1日1往復運航し、地域住民の渡島の足を確保している……

新聞関係ではどうであろうか。毎日新聞, 58年8月15日「海女の島, 15の自立」には舳倉(へぐら)島とある。徳島新聞, 58年10月1日夕刊, 柳原敏雄「むしあわび」の項には, 舳倉島(へくらじま)とある。朝日新聞, 60年9月16日, 「地名を探る——海士町」には, 舳倉(へぐら)島とある。60年に北国新聞に連載された「舳倉の海びと」には, 付図のように, 題字に毎号「へぐらの……」と仮名をふっている。

以上の記事に見られるように, 輪島市の地元では「へぐらじま」以外にあり得ない。

「氏堂」か「お堂」か

舳倉島よりは, はるかに小さい問題であるが, 辻堂の呼称の問題がある。T₂氏は就実女子大学研究年報第2号(1983)における「辻堂の研究」(その1)77頁において, 次のように述べている。



▷▷1

海士町
舳倉島

辻堂は地域によって様々の名称で呼ばれているのが一般的である。岡山県の備前地域では、一般に「お堂」と呼び、備前地域では「辻堂」や「四ツ堂」と呼ぶのが通例のようである。また四国の香川県では「辻堂」と呼び、愛媛県では一般的に「茶堂」と呼んでいる。また徳島県では「氏堂」或は「四ツ足堂」と呼ぶ。高知では一般に堂個々に名称を持っている。このように見ていくと辻堂は各地で個々の名称で呼ばれ、また意味付けられていることがわかる。

たとえばKの「日本の民俗」徳島によれば「吉野川上流南岸山村（麻植・美馬・三好郡）や那賀川上流には……氏堂が多い。美馬郡郷土誌によると、明治13年の記録にあるだけでも、美馬郡内に下の数の氏堂があった。

口山村（現穴吹町）—20、一字村—30、端山村（現貞光町）—25、半田村（現半田町）—24、八千代村（現半田町）—23、西祖谷村（現三好郡）—24」と報告されており、その分布の密度が高いことを示している。同時にその形状においても「四ツ足堂とも呼ばれるように、壁も板葺もつけず吹き放しが多いが、中には戸をいれたものもある。屋根は方形造りの萱葺きで、近年トタンに改造されてきた。やや立派なものは枡組、象鼻（彫刻）などもある。」と報告されている。このように徳島県ではその形状から「四ツ足堂」とも呼ばれていることがわかる。

「日本の民俗、徳島」（第1法規，昭49）129～130頁において、確かにK氏はそのように述べておられる。K氏は優れた民俗研究者であり、数多くの業績のある尊敬すべき方（故人）であるが、この点だけは疑問をいだかざるを得ない。実は私が貞光町の猿飼、吉良、木屋、広瀬の諸山間集落のお盆行事を取材したのは、58年8月13日、14日であったが、土地の長老達（猿飼の西岡田氏、吉良の岸本氏）は氏堂とも四ツ足堂ともいわず、ただ「お堂」といていた。例をあげると

西岡田 「関係ないんでわ。今とったお堂で、この付近の受持ちのお寺の住職がきて、本尊さんが供養を皆寄ってする。……」

岸本 「……そうそう。数回お堂でしたっわけじゃな。……」

のようである。したがってK氏がその著書へ、「その土地では（又は一部では）通例「お堂」と呼んでいる」と書いておいてくれれば問題がなかったわけであるが、それがないために、T₂氏はK氏にしたがって、徳島ではすべて氏堂又は四ツ足堂と呼ぶと決めてしまったものである。経験豊富なK氏が実地検証をしていない筈はないが、少なくとも貞光町では上記のようであり、一方、T₂氏は実地検証をしておられる可能性は薄い。徳島県のある郷土史家に聞くと、徳島

県では氏堂といっているという。私はこの方面は軽く触れただけで深入りする気はないが、誰かが全県にわたって悉皆調査を行い、こういう呼称について確定して欲しいものである。

「取り分け」か「取り上げ」か

前出の佐渡昭八氏の母（元海女、80歳代）から徳島県の知人・Mさんあてにきたハガキがある。それは59年3月14日の日付けとなっている。

「前文御免下さいませ昭八春代去る二日に島（注：舩倉島のこと）へ渡りましたので私が代筆します 戦前は取り分けと言ふて男手のない海女は男をやとって生きづなを引いてもらったので分け前は男四分女六分と分けました 戦後男達は漁業にはげみ海女は一人で（タライ）であわび取りしてゐます昔は海女が二人三人と居る家では海女一人に舟を（3ぞう）もってゐたものですが……」

これに対して民俗研究者として著名なS氏は、その著書へ次のように書いている。「海女がもぐって貝をとり海藻をむしると、櫂をもった舟上の男が腰綱を引いて浮揚を助けるのである。この一組はたいてい夫婦か親子であるが、他家の男を頼むと男は舟と弁当持で、取上げの四割、男は六割であった。」

山口県見島では「漁を休み、無償で共同の目的のために漁撈を行うこと」をトリアゲといっているので、輪島、見島始め多くのあま地帯を踏破、調査されたS先生が、うっかり書き間違えたかも知れないし、又、聞き違えたかも知れない。実際は取り上げであったかも知れない。私としては元海女のいう「取り分け」を信じたいが、こういうことは決着のつかないまま後世へ残すことになるかも知れない。

「アルキ」と「アマアルキ」

61年7月30日、あまのメッカとして著名な鐘崎を探訪していたときのこと、郷土史家・日並文夫氏の御案内で元海女・七田マユミさん（明治37年生：81歳）のお宅を訪問する。以下は七田さんの話である。

「若松の近くの白島（シランマ）へ7～8月に、2カ月行く。10数年も行っ

た。一船に海女4人乗り、船頭4人ぐらいで行った。これを白島渡りとかアルキといった。そこは水がないので、島の裏に、岩をこしてシボシボ水が落ちるのを、すくっていた。白島まで、船をこいで昔、7時間かかっていた。アルキが出るといっていた。」

つまりアマアルキのことである。アマアルキは、野間吉夫氏が昭和28年に書いた「筑前鐘崎の海女聞書」民間伝承17巻8号に、「花田しげ女(71歳)の話」として、「むかしは小呂の島や白島、角島までアマアルキに行きよりました」と記されており、K₂氏もO氏もその論文にアマアルキの語を使っている。

海女達がアルキに出るからアマアルキ……ということで、アマアルキの語は分かり易いが、海女自身がアマアルキと自称するかどうかの問題で、七田さんのようにアルキ又はアルキが出たといっていたものと思うが如何なものであろうか。既に故人になられた花田しげさんに聞き合すこともできない。

現 と 前

徳島県海部郡由岐町阿部、ここは古くからの伝統的あま集落である。ここではアワビのノミによるつき傷の有無などを、竹ベラで調べているが、これは阿部独特の風習のように見受けられる。さて、これはいつ頃から存在しているものか、まだ聞いていなかったと思い、他のいくつかの項目と共に、旧知の元阿部漁協参事(現海士)、蝶々勝行氏に問い合せた。すると蝶々氏が調べてくれて「現組合長に聞いてみたんだが、15年に組合に入ったときにはもうあったという」と電話で答える。そこで、それも原稿の一部に書き加え、「現組合長の明石氏が昭和15年に入ったときには既にあったといい……」と書いた。生原稿(タイプ打ち)をコピーし、誤りの有無を見てもらうため、蝶々氏にも送った。すると、62年5月6日の晩であるが、夜8時過ぎ、蝶々氏より電話がかかってきた。「あのへらは、現でなく前だ。前組合長の山中さんですよ」。電話の声の聞き違えでゲンでなくゼンであり、早速生原稿を訂正した次第である。

彼が「前組合長の山中さんが……」といってくれておれば間違わなかったのに、「〇〇組合長が……」とだけいったため聞き間違えたわけで、又、私もそのとき「現組合長の明石さんですね」と念をおしておれば「いや、違う。前の山

中さんだ」とその時点で誤りが正されていたのである。又、原稿のコピーを送っても、もし蝶々さんが現業の多忙と疲労で、コピーにろくに目を通さずに「ああ、あの程度で充分でしょうね」という人であったなら、誤ちのまま印刷されてしまった可能性もあり、悔いを残すことになったことであろう。確認の大事さが身に沁みたる小事件であった。

おわりに

本小稿では、自分の失敗例も含めて、いくつかの例をあげ、民俗学における主として取材に関わるとされる問題点を掘り出してみた。「その言葉はどう書くんですか？ どんな漢字ですか？」と聞くと、「どう書くんか知らん。昔からそういっているけど…」という返事が多く漁民から返ってくる。文字化されていない伝承的言語が漁村には多い。この面の取材はいくつかの失敗を重ねながら自分なりの取材方法を確立していくしかないと思う。ある学者は言葉の掘り出しには、同じ集落から、3人の人に同じことを聞いて確かめるという。ある集落でAとBに聞いた場合、それぞれ違った用語を教えてくれることがある。別称があるのである。その場合はもっと多くの人に聞き、どちらの言葉をより多く使うか確かめるべきである。大家がやった業績だからもう手をつけないとか、権威ある著作に書いてあるからそれを信じこむのでなく、自分の眼・耳で確かめ、先人の跡を再び踏んでみなければいけないのではないか。それをやらないと、伝承的言葉を覚えている古老達が故人になってしまえば、事実が不明確のまま世に残っていく場合もあり得るのである。 (1987年10月26日 記)